HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ブラジル・南パンタナールにおける観光業の導入と発展
Author(s)	仁平, 尊明
Citation	地理空間, 4(1), 18-42
Issue Date	2011
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56758
Type	journal article
File Information	4-1, 18-42.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

地理空間　4-1　18-42　2011

ブラジル・南パンタナールにおける観光業の導入と発展

仁平尊明
北海道大学文学研究科

本研究は，ブラジル・マットグロッソドスル州の南パンタナールを対象として，農家民宿（ファゼンダポウザーダ），ホテル，釣り宿などの宿泊施設の経営を分析することから，パンタナールにおいて観光業が発展するための課題を解明する。その際，エコツーリズム発展の地域的差異に着目した。すなわち，エコツーリズムを提供する宿泊施設が集中するエストラーダパルケ（公園道路）沿線を「核心地域」，主要都市から離れた奥地であるニェコランディアを「核心周辺地域」，州境・国境地帯を含む遠隔地のパイアグアスを「外縁地域」に区分した。考察の結果，地域的に偏った観光業の発展，環境保護と観光業発展のアンバランス，多様な観光客への対応力，人の激しい流動性，パンタナール周辺地域との連携の低さなどの点で課題が指摘された。今後，内発的で持続的な観光業の発展を提案していくためには，湿原内外の資源を活用しながら，それぞれの地域性を十分に考慮した計画が必要である。
キーワード：エコツーリズム，核心地域，核心周辺地域，外縁地域，パンタナール

Ⅰ　はじめに

パンタナールは，ブラジルの中西部からボリビアとパラグアイの国境付近にかけて広がる世界最大級の熱帯湿原である。その面積は約23万km^2であり，日本の本州に匹敵する。ブラジル領に含まれるパンタナール（13.8万km^2）は，マットグロッソ州とマットグロッソドスル州の州境によって，北部の北パンタールと南部の南パンタナールに分けられる（図1）。さらに，それぞれの地域は，河川を境界にして，ニェコランディアやパイアグアスなどの下位地域に分けられる。

パンタナールの土地利用は，雨期（11～5月）と乾季（6～10月）で大きく異なる[1)]。雨期には，湿原をとりまくブラジル高原やマラカジュー山脈などに降った雨が流れ込み，広い範囲が水没する。乾季には，水没していた場所で草本が一斉に芽吹き，天然の牧草地となる。このような季節的な土地利用は，熱帯特有のビオトープから構成されるものであり，多様な野生動物と熱帯植物の生息域となっている（丸山・仁平，2005；Bertelli, 1984）。また，天然の牧草地は，19世紀後半の開拓時から続く畜産業の重要な基盤である（Souza, 1973）。パンタナールの畜産業は，天然の牧草地に依存した粗放的な放牧であり，肉牛の仔取り繁殖経営を特色とする（Proença, 1992；丸山ほか, 2009）。

パンタナールにおける農場（ファゼンダ）の経営は，観光業の導入により大きく変化した。その契機は，まず，1981年にパンタナールの一部が国立公園に指定されたことであり，次いで，その豊かな動植物層に注目した外国の野鳥愛好家がパンタナールを訪れたことだった（Trent, 2000）。さらに，1980年代の後半から1990年代にかけては，パンタナールの奥地においても外国人観光客を受け入れる農場が現れたことにより，エコツーリズムを売りにする観光業が急速に発展した。その結果，パンタナールはブラジルでも有数の観光地として知られるようになり，2000年には湿原の一部がユネスコの自然遺産に登録され，2002年にはブラジル観光省の「エコツーリズム拠点（ポーロスデエコツーリズモ）」にも指定されたため，観光地

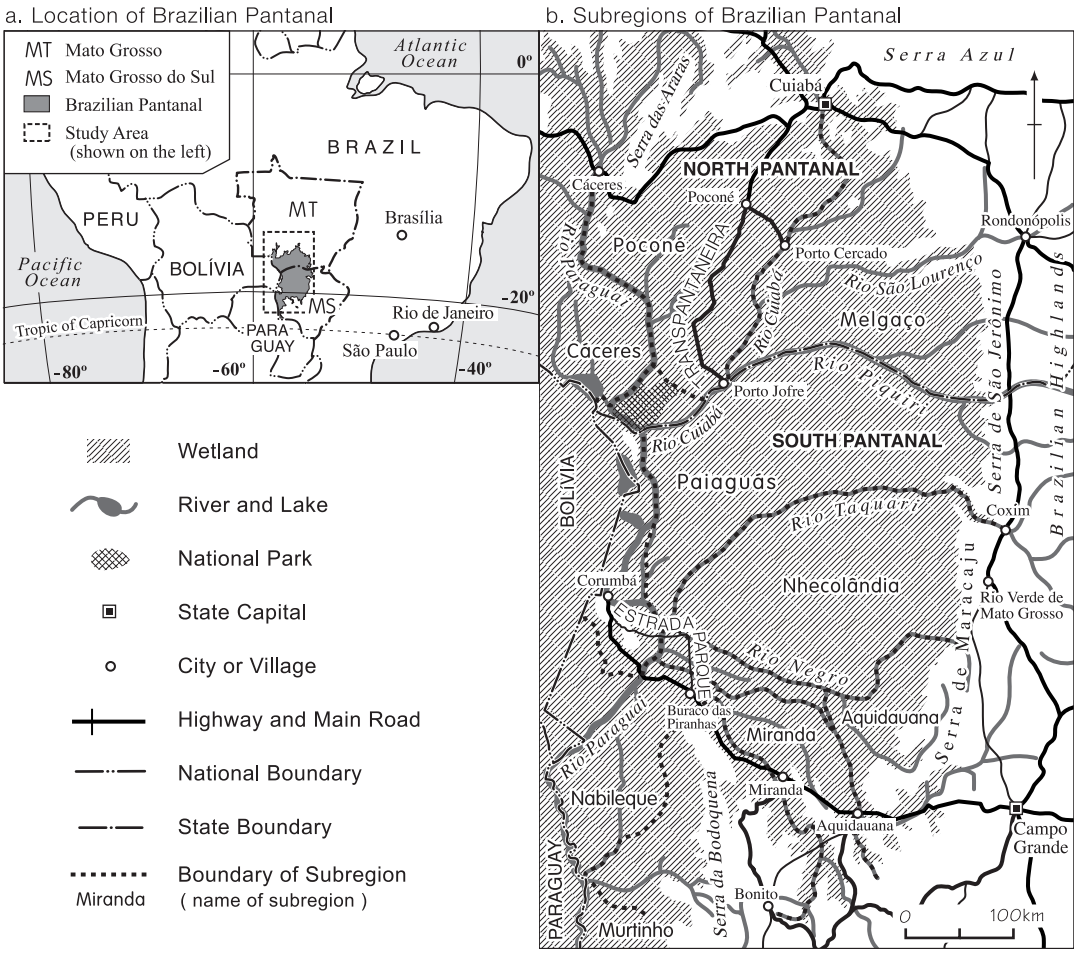


図1　研究対象地域

としてのパンタナールの知名度が高まった。

主に外国人観光客を対象としたパンタナールの観光業であるが，その導入時期と発展過程には地域的な差異が見られる。パラグアイ川と主な支流に沿った一部の集落では，1970年代から大型の川魚を狙うスポーツフィッシングが徐々に盛んになっていった（Fabichak, 1978; Bordest et. al., 1996）。河川沿いの漁業集落では，スポーツフィッシングの観光客を受け入れる釣り宿（ペスケイロ）が立地するようになり，後に滞在型の釣り船（バルコホテル）などの大型の施設が加わったり，生き餌（イスカ）を販売する店が出現した（Banducci and Moretti, 2001）。一方，1990年代以降から盛んになったエコツーリズムは，農家民宿（ファゼンダ・ポウザーダ）へ滞在して，動植物の観察や散策ツアーが中心になるという点で，スポーツフィッシングとは性格が異なる。しかし，農家民宿であっても，河川に近い場所では，ピラニア釣りやダイビングなどもエコツアーの一貫として滞在客に提供されている。

パンタナールにおいてエコツーリズムが盛んになった地域は，南パンタナールでは，コルンバか

らブラーコダスピラーニャスにかけてのエストラーダパルケ（公園道路）沿線であり，北パンタナールでは，ポコネのトランスパンタネイラ（パンタナール縦断道路）沿線である（Maruyama et. al., 2005）。これらの地域は，大都市からの近接性が高いため，農家民宿や釣り宿の他，大規模なホテルなどが多数立地し，大勢の観光客に多様なエコツーリズムを提供している。一方，南パンタナールの奥地に位置するニェコランディアにおいても，エコツーリズムを導入する農場がいくつか出現した。そのような農場は，所有地が1,000ha程度の小規模なものから1万haを超える大規模な農場まで様々ある（仁平・コジマ，2007）。さらに近年では，州都や都市から遠方にあるパイアグアスにおいても，エコツーリズムを導入する農場が出現した。

パンタナールにおけるエコツーリズムの発展は，それが自然環境と経済に与えるインパクトを考慮すると，グローバルスケールで考察しなければならない課題である。それを達成するためには，ミクロスケールでの現地調査と考察の積み重ねが必要であると考えられる。本研究は，筆者が2001年から調査に携わってきた南パンタナールを対象として，エコツーリズム発展の地域的差異に注目することから，パンタナールにおいて観光業が発展するための課題を明らかにすることを目的とする。

ここでいう地域的差異とは，まず，農家民宿やホテルなどの宿泊施設が集中するエストラーダパルケ沿線を「核心地域」とする。次いで，主要都市から離れた奥地であるにも関わらず，エコツーリズムを始める農場が出現したニェコランディアを「核心周辺地域」とする。さらに，マットグロッソドスル州との州境地帯を含み，2000年以降にエコツーリズムを始める農場が出現した遠隔地のパイアグアスを「外縁地域」とする。

また，エコツーリズムは，地域の動植物などの自然環境を対象として，専門のガイドを伴うツアーによって成立する。ブラジルで実施されているエコツーリズムに対しても，様々な解釈が付けられてきた（Paixão, 2004; Honey, 2008）。しかし，ここでは複雑な定義を避け，エコツーリズムとは，パンタナールの宿泊施設によって提供されるエコツアーを含む観光業とする。

Ⅱ　エコツーリズムの核心地域：エストラーダパルケ沿線

1．エストラーダパルケ沿線の宿泊施設の分布

南パンタナールのエストラーダパルケは，ボリビアとの国境の町・コルンバから湿原に入り，ポルトダマンガを経て，連邦道路262号線沿いのブラーコダスピラーニャスに至る総延長120kmの鍵型の道路である（図2）。トラックで牛を搬送するために1970年代に整備された道路であり，当初はウシ街道（エストラーダボイアデイラ）と呼ばれていたが，沿線における観光業の発展に伴って1993年にエストラーダパルケとして州の保護道路に指定された。エストラーダパルケには74の木橋がかかっており，畜産物や生活物資を運ぶインフラであると同時に重要な観光資源となっている（図3）。また，2001年には日本のODAによって展望台（ミランテ）が4か所に建設された。

エストラーダパルケは，コルンバからクルバドレキまでは南北に走る。その中間にあるポルトダマンガは，艀（はしけ）によるパラグアイ川の渡河点であり，漁業，観光業，道路工事関係者などが生活する集落である。この付近は海抜100m以下と低く，増水時にはしばしば通行止めになることもある。エストラーダパルケは，クルバドレキからブラーコダスピラーニャスまでは南北に走り，ミランダ川やアボーブラル川などのパラグアイ川の主要な支流を通過する。ミランダ川の合流

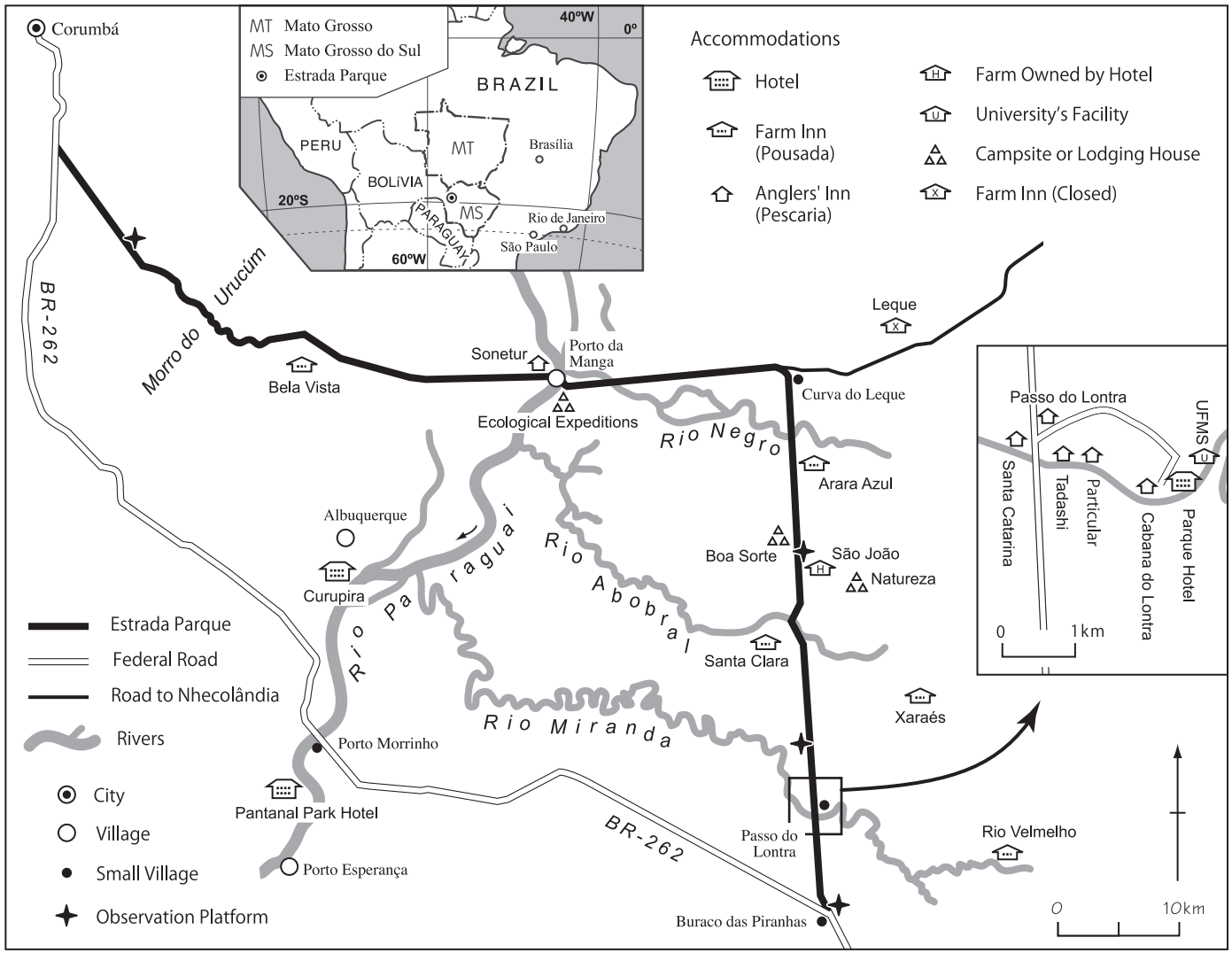


図2　エストラーダパルケ沿線における宿泊施設の分布（2006年）

（現地調査により作成）



図3　エストラーダパルケの木橋
（2005年3月　仁平撮影）
自動車1台分しかない細い木橋を渡るのは，パンタナールにおける観光の売りでもある．エストラーダパルケ沿線では，カピバラ，アナコンダ，アメリカヌマシカなどの野生動物も頻繁に目にする．

地点であるパッソドロントラ（カワウソの渡しという意味）は漁業集落でもあり，宿泊施設ばかりでなく，漁船の停泊場，生き餌の販売店などが立地する。

エストラーダパルケ沿線は，湿原の下流域に位置するため水量が豊富であり，鳥類，ワニやヘビなどの爬虫類，カピバラやカワウソなどのほ乳類，水辺を生息域とする動物が頻繁に見られる。外国人観光客に人気があるのが，南米カイマンやアナコンダなどの大型の爬虫類である。また，ピラニアやランバリなどの小型の魚も豊富であり，竹竿に糸と針を付けた簡単な釣り竿で容易に釣ることができる。ドラードやピンタードなどの大型魚を対象とする釣りでは生き餌が使われるが，エコツアーの参加客による小魚釣りには牛肉やとうもろこしの粒などが使われる。

エストラーダパルケ沿線には，2006年時点で19軒の宿泊施設が立地する。スポーツフィッシングを宿泊客に提供する釣り宿は，パッソドロントラに5軒が集中する他，ポルトダマンガに1軒立地する。パッソドロントラ（釣り宿）は，宿泊業の他，レストラン，バー，ガソリンスタンドも経営する。エコツーリズムを提供するホテルはエストラーダパルケ沿線に3軒立地する。これらは，パッソドロントラ，アルバカーキ，ポルトエスペランサの北に分散して立地する。いずれも大河川に面し，モーターボートとホテル専用の港を備えており，エコツアーばかりでなく，スポーツフィッシングも宿泊客に提供している。

既存の農場が観光業を始めた農家民宿は5軒立地する。農家民宿は，主に動植物の観察などのエコツアーを宿泊客に提供することから，エコロッジとも呼ばれる。ウルクン山麓に拓かれたベーラビスタ以外は，パラグアイ川の東部に分散する。元々が放牧農場だったこともあり，必ずしも大河川沿いに立地するわけではないが，敷地内には湖や丘陵地などの風光明媚な場所を含んでいる。エストラーダパルケ沿線には，これらの3タイプの宿泊施設以外に，キャンプ場と素泊まりの部屋を提供する簡易民宿が3軒，および，ホテルに付随した観光用の農場と大学の研修施設が1軒ずつ立地する。

2．宿泊施設の類型とエコツーリズム

表1は，エストラーダパルケ沿線における宿泊施設の規模と開業年を示したものである。1960年代に開業した宿泊施設で現存するものは，パッソドロントラに立地する釣り宿2軒のみである。1980年代に開業したものは，3軒の釣り宿の他，ホテル，キャンプ場，大学の研修施設であり，パッソドロントラとミランダ川沿いに分布する。1990年代に開業したものは，2軒のホテルの他，釣り宿と農家民宿である。ホテルは，湿地帯や既存の集落から離れた場所を整地して建設されたものである。2000年以降に開業した宿泊施設は，農家民宿が4軒，キャンプ場，簡易民宿，ホテルに付随する観光ファゼンダである。これらの施設は，ネグロ川とアボーブラル川の流域かウルクン山

表１　エストラーダパルケ沿線における宿泊施設の属性（2004～2006年）

Type	Name	Starting Year of Accommodation	Area （ha)	Number of Room	Capacity (person)	Charge (Real/person)
●	Cabana do Lontra	1969	(accommodation only)	19	60	50
●	Santa Catarina	1969	200	6	40	50
●	Sonetur	1981	(accommodation only)	20	80	100, 150
●	Passo do Lontra	1982	(accommodation, restaurant, shop and gas station)	14	30	45, 80
●	Particular	1985	(accommodation only)	4	27	50
■	UFMS	1988	(accommodation and study rooms)	8	35	-
○	Natureza	1989	500	3	22	100
★	Curupira	1989	(accommodation only)	13	83	125, 208-250
●	Tadashi	1993	8	17	65	110
★	Pantanal Park Hotel	1994	600	41	120	100, 275, 408
★	Parque Hotel	1997	190	18	74	191, 225
◎	Rio Velmelho	1998	7,000	9	27	200
◎	Arara Azul	2001	6,000（400 for farm inn)	30	90	130
○	Boa Sorte	2001	1,040	-	60	85
☆	São João	2001	1,750	-	-	-
◎	Bela Vista	2002	1,760	10	26	97.5
◎	Xaraés	2004	4,000 (350 for farm inn)	17	46	200
○	Ecological Expeditions	2005	(accommodation only)	12	24	35, 70
◎	Santa Clara	2005	1,700	11	30	60
□	Abobral	-	2,000	-	-	-
□	Leque	-	(no data)	-	-	-
□	Sagrado	-	15,000	-	-	-
□	Santa Helena	-	1,000	-	-	-
□	São Bento	-	5,000	-	-	-
□	São Jose do Abobral	-	30	-	-	-

● : Anglars' Inn（Pescaria） ○ : Campsite or lodging house ★ : Hotel ◎ : Farm Inn (Pousada)
☆ : Farm Owned by Hotel ■ : University's Facility □ : Other Farm

（現地調査により作成）

地の山麓に立地する。このように，エストラーダパルケに立地する宿泊施設は，建設年代の古い順より，釣り宿，ホテル，農家民宿・キャンプ場となる。また，2000年以降に開業した宿泊施設が多い。以下，これらの宿泊施設の経営の概要を説明する。

釣り宿の部屋数は4～20，収容人数は30～80である。収容人数の面では，小規模から大規模な経営まで様々である。1人1泊あたりの宿泊料金は50～150レアルであり，この地域では低～中の価格帯である。宿泊料金が100レアル以下の釣り宿の場合，ボートを借りてスポーツフィッシングに参加する場合，ガソリン代や運転手代などの追加料金を払う必要がある。釣り宿の敷地は，河川

に面した宿泊施設だけの小規模なものが多い。以前は農場だったサンタカタリーナでは，敷地の一部をキャンプ場や遊技場にしている。

釣り宿に宿泊する主な観光客は，ヨーロッパを中心とする外国人とブラジル人のグループである。外国人とブラジル人の割合は，宿によっても異なるが概ね50％ずつである。大規模な釣り宿ではツアー客などの大きなグループも受け容れるが，それ以外は家族・友人などの小さなグループの滞在が多い。年間述べ宿泊客数は数百～2,000人であり，農家民宿やホテルの平均よりも多い。観光のピークは，カーニバルによる連休がある3月，学校の休業や祝日がある7～9月などである。資源保護のための禁漁期間となる10月末から2月にかけては，休業する釣り宿も多い。

宿泊客の平均滞在日数は3泊であるが，長期休暇を利用して1週間程度滞在する場合もある。釣り宿で提供するツアーは，ほとんどがモーターボートを利用したスポーツフィッシングである。宿泊客によっては，ボート，エンジン，生き餌を持参するものもある。近年では，動植物の観察やダイビングなどのエコツアーを始める釣り宿も出てきた。例えば，ポルトダマンガのソネトゥールでは，大河川に面していない農家民宿（ベーラビスタ）の客にボートツアーを提供している。

次にホテルの経営をみると，部屋数は13～41，収容人数は70～120，平均的な宿泊料金は200レアルである。釣り宿と農家民宿と比較して，大規模な経営であり，高額な宿泊料金である。敷地面積は，以前は釣り宿だったクルピーラでは宿泊施設だけの経営であるが，パルケホテルでは190ha，パンタナールパークホテルでは600haの面積を有し，農場内でのエコツアーやキャンプに利用されている。ホテルには，事務所のある母屋の他，独立したコテージや客室，専用に建設された大型のレストラン，充実した娯楽施設などが設置されている。

滞在する観光客の内訳は，ホテルによって差異がある。スポーツフィッシングを主に提供するクルピーラでは，ほとんどがリピーターのブラジル人グループである。ブラジル人の宿泊客の割合は，パルケホテルでは数％，パンタナールパークホテルでは20～30％である。外国人観光客は，ドイツ，オランダ，ポルトガル，フランス，スウェーデン，アメリカ合衆国，日本などであり，主にヨーロッパからパックツアーで来ることが多い。パックツアーの滞在日数は，多くの場合3泊4日である。年間の宿泊客数は500～1,500であり，大規模な釣り宿よりは少ない。宿泊の最盛期は12～2月，7～8月である。エコツーリズムを主に提供するホテルでは，禁漁区間であっても年末年始に観光客が多くなる傾向がある。

ホテルが提供するツアーは，農場の散策や乗馬，動植物観察の写真ツアー，スポーツフィッシング，ナイトツアーなどである。いずれもエコツアー専用の観光ガイドを雇用しており，さらに複数のモーターボートの運転手と契約している。パックツアーの場合は，さらにグループごとに観光ガイドが付くこともある。エコツアーの場合，参加する客が一人であってもガイドが付く。パッソドロントラのパルケホテルでは，エコツアーを目的とする客が増加したため，散策と乗馬用の観光農場として，近隣のサンジョアンを2001年に購入した。

次に農家民宿の経営をみると，部屋数は9～30，収容人数は26～90であり，アララアズールを除いて小規模な経営である。敷地は1,700～7,000haと広いが，客室は観光用に増築されたものがほとんどである。宿泊料金は60～200レアルであり，釣り宿よりも高額であるが，ホテルよりは安価である。宿泊料金には，3回の食事とツアーが含まれる。農場によっては，経営が農場（畜産）

部門と民宿部門に分けられるが，例えば父親が農場主で息子が民宿経営者であるなど，いずれも家族経営である。農家民宿の経営者と農場主は，パンタナールに住み続けているわけではなく，観光業を始めるために農場を購入した外部地域の出身者である。シャランエスとサンタクララの農場主兼経営者は，ポルトガル人である。

農家民宿に滞在する観光客は，50～80% が外国人の観光客である。外国人観光客の主な国籍は，オランダ，ポルトガル，フランス，イタリア，ドイツ，アルゼンチン，スイスである。年間の宿泊客数は250～1,000人であり，宿泊施設の類型の中ではキャンプ場と並んで少ない。主な宿泊客は家族や友人などの小さなのグループであり，平均滞在日数は2泊3日あるいは3泊4日である。観光業の最盛期は，12月と7月であり，ホテルとほぼ同じである。

農家民宿で提供されるツアーもまた，スポーツフィッシングを除いて，散策，乗馬，ナイトツアーなどがあり，ホテルとほぼ同じである。いずれの農家民宿も，大河川に面していたり，敷地内に川や湖を含むため，ボートツアーも提供している。しかし，農場に滞在するというイメージからかけ離れることもあり，スポーツフィッシングは宣伝していない。いずれの農家民宿もエコツアー専用のガイドを雇っている。シャランエスでは，WWF が計画するカワウソを対象とした野生動物保護計画に参加しており，生態学の専門家と IT の専門家も雇用している。

その他，キャンプ場と簡易宿泊施設は，収容人数が20～60であり，小規模から中規模の経営である。宿泊料金は35～100レアルであり，釣り宿と並んで安価である。年間の宿泊客数は約300人であり，農家民宿と同じか若干多い程度である。滞在する観光客のほとんどが外国人の若いバックパッカーであり，個人または数人の小さなグループである。これらの宿泊施設にも観光ガイドが雇われており，動植物の観察ツアーや小魚釣りなどのエコツアーを提供している。しかし，牛と馬を飼育しておらず，モーターボートも所有していないため，提供されるエコツアーには制限がある。

3．宿泊施設の類型別に見た経営事例

1）釣り宿

パラグアイ川右岸のポルトダマンガに立地するのが，ソネトゥールである。現在の経営者夫婦は，コルンバに住んでいる。創設者の父親から経営を引き継いだのは1990年だった。ソネトゥールという名前は，その創設者（So 氏）と配偶者（Ne 氏）の頭文字に観光（turismo）を組み合わせた造語である。この釣り宿は，約30家族が住んでいるパッソドロントラ集落の東端に立地する。しばしばパラグアイ川の洪水の被害を受けることがあるため，パッソドロントラには，高床式の住居と2階建ての小学校がある。

ソネトゥールは，釣り宿の中では規模が大きく，20の客室にそれぞれ4つのベッドが備え付けられている。各部屋は，TV，冷蔵庫（フリゴバール），扇風機，エアコンも完備する。宿泊できる最大の人数は80であるが，パラグアイ川増水時などの急な宿泊客に対応するために，パンフレットやガイドブックでは宿泊できる人数を60と公表している。古い客室には，エストラーダパルケの道路作業員も長期で滞在している。宿泊料金はすべて込み（ジアリアコンプリーダ）料金が150レアルであり，通常料金が100レアルである。すべて込み料金には，船，船外機，クーラーボックスの借り上げ代の他，運転手，食事（朝食，昼食，夕食）の値段が含まれる。通常料金には，船とクーラーボックスの借り上げ代が含まれる。ガソリンは別売りで，20リットル単位で販売している。生き餌（イスカ）も30匹単位で販売しており，1匹あたり

の価格は70センターボである。生き餌の種類は，トゥビーラ，カランゲージョ，ピランボーヤなどである。

観光客の平均滞在日数は3泊4日であり，チェックアウト時に600～1,800レアルを支払うグループが多い。宿泊の最盛期は8月であり，10月末から2月のピラセマ（魚の産卵期）にはホテルを閉める。最盛期には1週間あたり10～20人の宿泊客を受け入れる。宿泊客の内訳は，ブラジル人が60％であり，外国人が40％である。ブラジル人の宿泊客は，サンパウロ，パラナ，サンタカタリーナ，ガウーショ（リオグランデドスル），ミナスジュライスなどから訪れる。外国人の宿泊客は，以前は日本人やフランス人も多かったが，現在はスペイン人がほとんどである。また，以前はほとんどが釣り客であったが，近年では動植物の観察などのエコツアーを目的とする宿泊客も増えてきた。宿泊客が参加するツアーの内訳は，釣りを含めたボートツアーが70％であり，エコツアーが30％である。ボートツアーの内20％は，ダイビングまたはシュノーケリングを目的とする。エコツアーの主なメニューは，徒歩散策（パッセイオ）や写真散策（サファリフォトグラフィア）である。エコツアーとダイビングにはガイドが付くため，1件あたり30レアルのガイド料がかかる。

近年，スペイン人の宿泊客が多くなった理由は，スペイン系の旅行会社と契約したためである。この会社は，コルンバ市街地から10km西，国境から5km東にあるキジャーホの森の中で民宿を経営している。その宿泊客をこの釣り宿にも滞在させて，タクアリ川とパラグアイ川の合流付近でダイビングを提供している。また，近隣の農家民宿・ベーラビスタの宿泊客にボートツアーを提供することもある。（調査年月：2005年8月）

2）ホテル

パッソドロントラのパルケホテルは，ミランダ川の後背湿地に立地する。その面積は190haであり，敷地を取り囲んで板敷きの遊歩道が整備されている（図4）。主な観光施設は，客室，レストラン，2か所の船着場，ボート置場，オフィスなどであり，これらは敷地の南東部に集中する。キャンプ場は6か所に点在し，遊歩道と同様に板敷きである。客室は湿地の上に作られた高床式のコテージである。コテージは2階建てであり，一棟あたり4～5の部屋がある。各部屋にはベッドが2つ，エアコン，トイレとシャワーが備え付けられている。客室と遊歩道の間には，網戸で囲まれた小部屋があり，外部の虫が寝室に入り込むのを防いでいる。その小部屋には，テーブルと冷蔵庫が備えら付けられており，夕涼みを楽しむことができる。湿地からコテージ床面までの高さは約2mであり，細い木の支柱で支えられている。バスルームの排水はコンクリート製のタンクに溜められる。宿泊施設の周囲に植えられている庭木は，ジェニパポ（樹高6m），カバセラ（6m），フィゲリーニャ（13m）などの常緑広葉樹や，アクリ（5m）などの椰子類である。湿地であるため，農家民宿や釣り宿のように果樹や野菜類は栽培されていない。

経営の責任者への聞き取り調査によると，パルケホテルはエコツアーの提供を目的に1997年に営業を開始した。宿泊施設はコテージとキャンプ場だけであり，宿泊料金は一泊一人あたり191レアル（朝食付きのパック）と225レアル（3食付きのパック）である。コテージに一度に宿泊できる人数は74人であり，キャンプ場は16区画に約54人が宿泊できる。レストランは96人が同時に食事をすることが可能である。提供する観光はエコツアーが主体であり，釣り客はほとんどない。2003年の宿泊は500～600人であり，3泊4日のパック旅行がほとんどであった。宿泊客が最も多い月は12～2月，7月であり，最も少ない月は6月

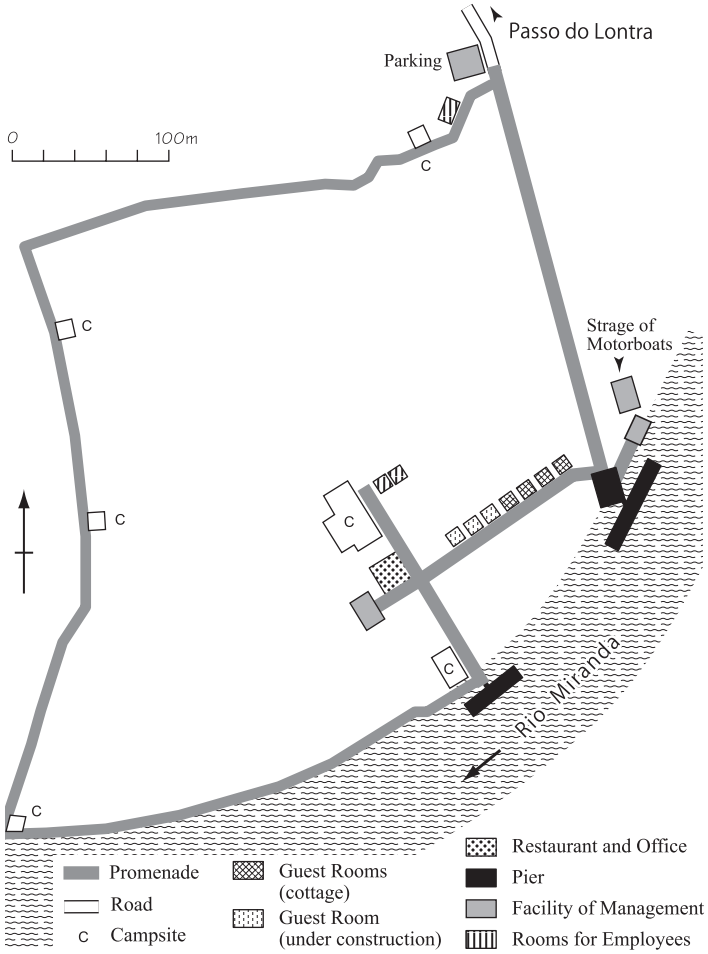


図4　エストラーダパルケ沿線におけるホテルの施設配置（2004年）
（現地調査により作成）

である。観光客の国籍はオランダ，フランス，ベルギー，アメリカである。ブラジル人は全体の2～3%にすぎない。従業員は20人であり，ほとんどがミランダとアナスタシオの出身である。従業員のうち9人がエコツーリズムのガイドであり，そのうち7人は2か国語以上の言語を話すことができる。エコツアーの参加客が一人であっても，必ずガイドが付いていく。今後の運営上の計画は，サッカーのグラウンドなどの娯楽施設を作ることであるという。（調査年月：2004年8月10日）

3）農家民宿

ネグロ川付近に立地するアララアズールは，農場全体の面積は6,000haであり，そのうち400haを農家民宿が使用する。牧場部門は，エストラーダパルケから500mほど東に入った場所に位置し，約1,000頭の牛を飼っている。農家民宿では，南北2つの湖（バイア）に挟まれた微高地に，客室，レストラン，ハンモック小屋などの農家民宿の施設が細長く配置される（図5）。農家民宿の中央には会議などに使用できる大部屋があり，東端には

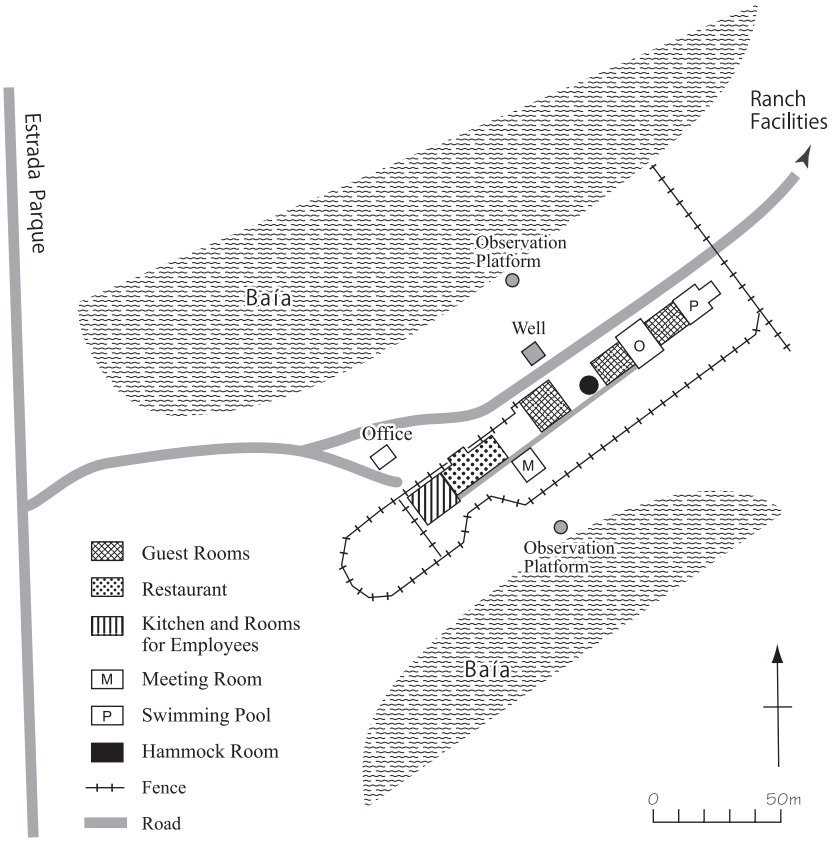


図5　エストラーダパルケ沿線における農家民宿の施設配置（2004年）
（現地調査により作成）

プールが設置されている。湖には30匹ほどのジャカレ（中南米ワニ）が生息しており，観光資源となっている。中庭には，アセロラ，ライム，パパイヤ，マンゴーなどの果樹の他，ピタンガ，ピングジョ，セリグエラ（桑），アクリなどの庭木が植えられている。建物を囲んでいる白い牧柵は，牛やワニが民宿内に入らないように，2重に作られている。客室は3棟30部屋であり，最大収容人数は大型バス2台分の90人である。宿泊料金は3食付きで130レアルであり，農場内の散策ツアー1件につき平均して20レアルのガイド料が加算される。年間述べ宿泊客数は約1,000人であり，観光客の平均滞在日数は3日である。宿泊業は7月と12月が最盛期であり，2月と5月が閑散期である。主な宿泊客は，ヨーロッパから来る外国人観光客であり，ブラジル人の割合は約30％である。

農家民宿の従業員は5人であり，最盛期には臨時雇用を含めて12～15人である。牧夫などの牧場部門の従業員は5～6人である。農家民宿と牧場の従業員は，コルンバとミランダの住人である。農家民宿のオーナーは，南部出身のドイツ系ブラジル人である。彼女は2001年にこの農家民宿を購入して，エコツーリズムの経営をはじめた。以前の経営者は1992年に観光業を開始して

おり，現在の観光施設のほとんどが当時のものである。（調査年月：2004年8月）

Ⅲ　核心周辺地域のエコツーリズム：ニェコランディアの例

1．観光資源の概要と宿泊施設の分布

ニェコランディアはネグロ川とタクアリ川に囲まれた地域であり，南パンタナールではパイアグアスと並んで大きい。その面積は2.69万 km^2 であり，ブラジル・パンタナールの約19％を占める（Silva and Abdon, 1998）。ニェコランディアという地名は，19世紀末にこの地を拓いた開拓者のニックネームであるニェコに因んだものである（Proença, 1992）。ニェコランディアは，肉牛の繁殖を目的とした粗放的な放牧が長年続けられてきたが，エストラーダパルケ沿線や北パンタナールにおける観光業の発展を受けて，エコツーリズムを導入する農場が1990年代に出現した（Barros, 1998；仁平，2003）。

エストラーダパルケ沿線と比較して内陸にあるニェコランディアでは，哺乳類と鳥類の個体数が多いことが観光業の売りである。例えば，哺乳類では，オオアリクイ，コアリクイ，アメリカヌマシカ，アルマジロ，カピバラ，カワウソなどは頻繁に見かけるし，場合によってはピューマやジャガーが出没することもある。鳥類では，パンタナールを象徴する留鳥のズグロハゲコウ（トゥユユ）や，ベニヘラサギ，サギ類，オウム，オオハシなどの個体が豊富であり，ニーニャルと呼ばれる集団営巣も見ることができる。また，乾季に水が少なくなった湖には，中南米ワニが群がっている。

ニェコランディアにおいて観光客を受け容れている農場は，2005年の調査時点で6つ確認できた。図6は，それらの敷地を2000年に撮影された衛星写真上に示したものである。これらの農場は，南東部のバイアダスペドラス（A）を除いて，すべて

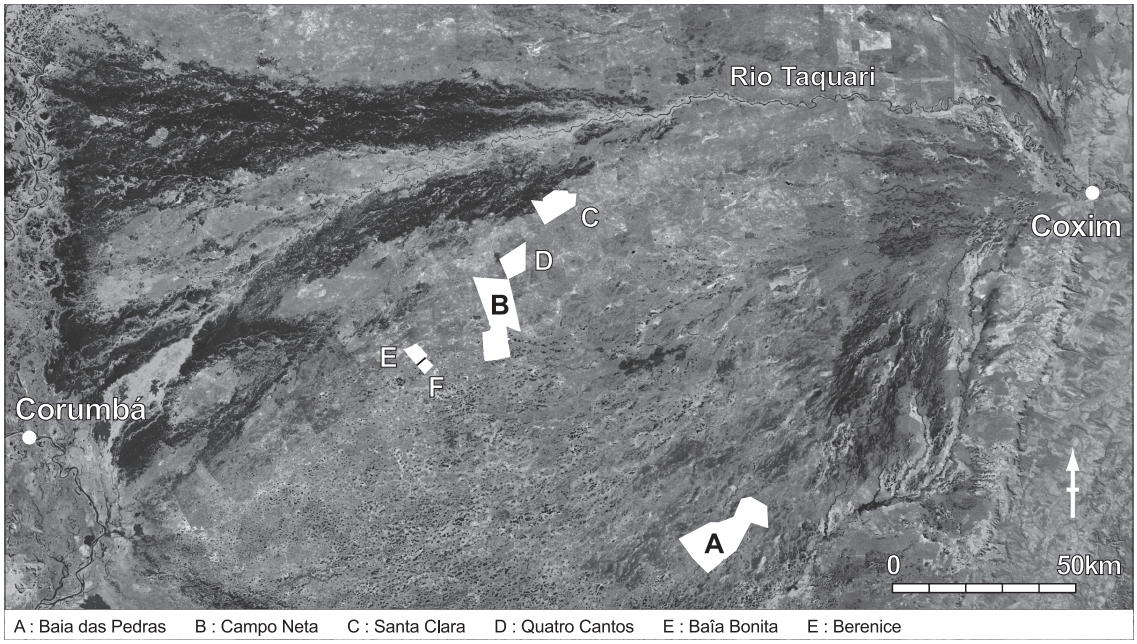


図6　ニェコランディアにおける観光農場の分布（2004年）
（現地調査と衛星写真により作成）

ニェコランディアの中央に位置する。また，表2は，これらの経営の概要を示したものである。敷地面積に注目すると，バイアダスペドラスとカンポネータ（B）が1万 ha を超える大規模な農場，サンタクララ（C）とクアトロカントス（D）が数千 ha の中規模な農場，バイアボニータ（E）とベレニーセ（F）が数百～千数百 ha の小規模な農場と分類できる。いずれの農場主も，カンポグランデやコルンバなどの大都市に居住している。これらの宿泊施設へ向かうためには，西からはコルンバとエストラーダパルケを，東からはコシンとリオベルデを経由して，網の目のように張り巡らされた農場内の道路を移動しなければならない。しかし，パンタナールの伝統的な農場に滞在し，本物の農場体験や，パンタナール住民（パンタネイロ）の生活を垣間見ることができることも，ニェコランディアにおけるエコツーリズムの醍醐味である。

２．農場の規模別に見た経営事例

１）大規模農場

バイアダスペドラスは，東西20km 南北15km に敷地が広がる大農場である（図7）。その母屋は，敷地内を北東から南西に流れるカステロ川沿いにある。この農場は，ニェコランディア南部の草分けの一つであり，母屋（セッデ）の敷地内で小学校を運営するなど，地元の盟主である。母屋の建物の隣には，この農場に通う児童の宿舎や，給食施設がある（図7b）。母屋の敷地内とそれに隣接して，牛の屠殺場（石けん作り場を含む），牛革のなめし・染色場，豚小屋，発電機，牛囲い（マンゲイラ），従業員や牧夫の家などの農場施設が作られている。

この農場では，母屋を改装したことを契機に，2002年に親類と知人を泊めるようになり，2003年から観光客を受け入れるようになった。宿泊料金やエコツーリズムの料金などは，2003年の調査時点においては設定の途中であった。客室は母屋を改装した5部屋のみであり，すべてにトイレとシャワーが付いている。軒下にはハンモックを吊るためのフックが柱ごとに付いている。この農場が提供する主なエコツーリズムは，散策と乗馬である。宿泊業を始めたばかりであり，農場主自らがガイドとなって農場内を案内している。（調査年月：2003年8月）

カンポネータは，近隣のバイアボニータ農場で観光業が成功していたのを受けて，1994年に観光業を開始した。宿泊料金は，3泊4日のパックで1人1,800レアルである。この金額には，カンポグランデやコルンバなどの主要都市からの移動費，滞在費，エコツアーの料金などのすべてが含まれる。この農場で提供されるエコツアーは，農場内

表2　ニェコランディアにおける宿泊施設の属性（2004年）

Mark on Figure 6	Name of Fazenda	Area (ha)	Starting Year of Farm Lodge	Number of Room	Number of Cattle	Area / Cattle
A	Baia das Pedras	15,500	2003	5	3,500	4.4
B	Campo Neta	14,500	1994	5	2,300	6.3
C	Santa Clara	7,200	2004	4	1,900	3.8
D	Quatro Cantos	4,000	2002	4	800	5.0
E	Baía Bonita	1,750	1990	9	870	2.0
F	Berenice	800	2002	4	-	-

（現地調査により作成）

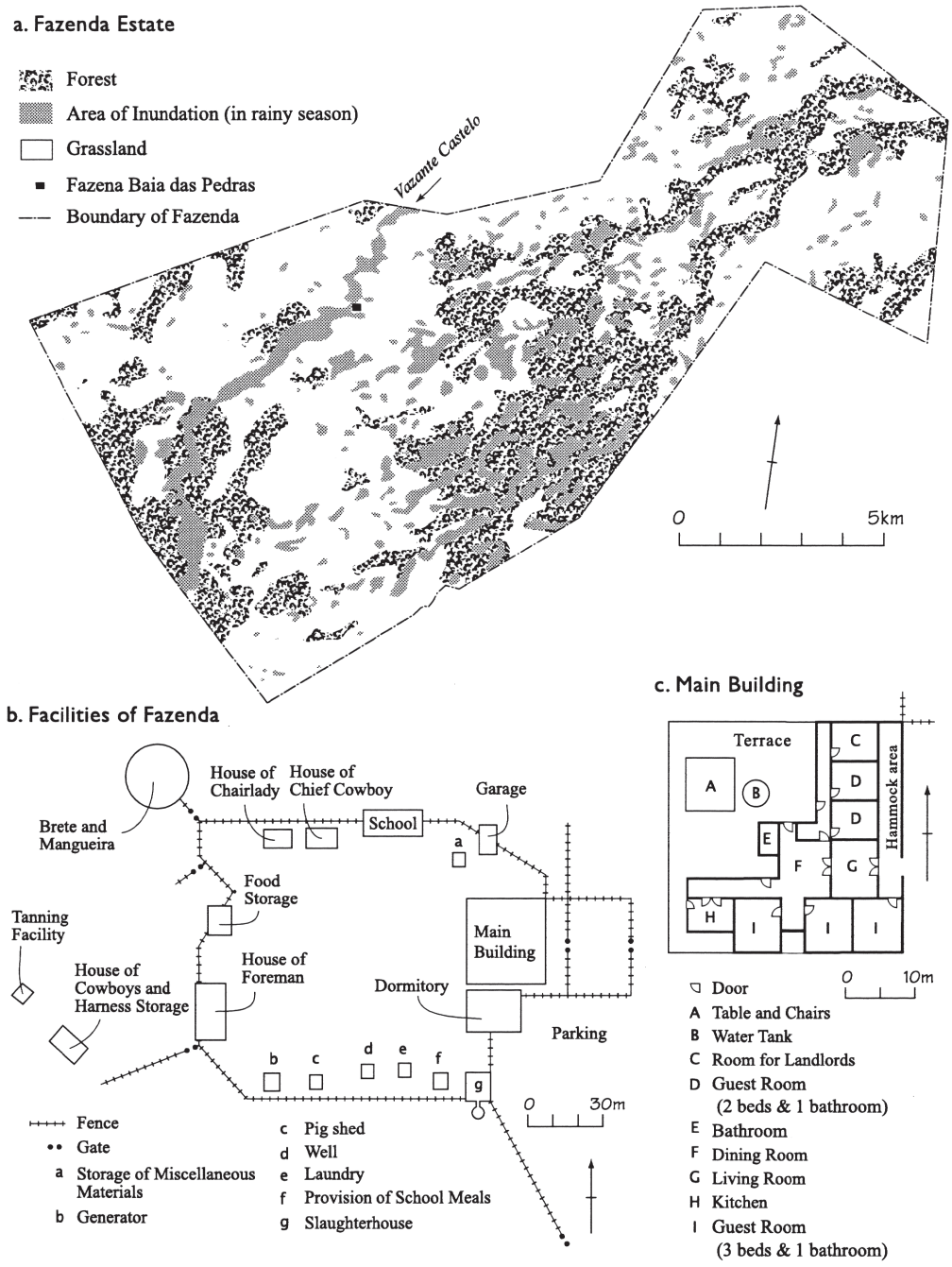


図7　ニェコランディアにおける農家民宿の敷地と施設配置（2003年）
（現地調査と衛星写真により作成）

の散策，乗馬，ナイトツアーなどである。母屋のすぐ前にあるカピバリ川の間欠河川では小魚釣りもできる。年間の宿泊客数は延べ約200～300人であり，そのうちの60～70％が外国人である。観光客の国籍は，多い順より，ブラジル，アメリカ合衆国，フランス，オーストラリア，ベルギー，イタリア，日本である。観光のピークは乾季の7～9月，および雨季の11～12月である。農場は5つの牧区（インベルナーダ）に分割されており，農場主の家族の他に1家族が南部の1牧区を管理している。（調査年月：2003年8月）

2）中規模農場

サンタクララは，著名な作家のアビーリオ・バホース氏が所有する農場の一つである。同氏はニェコランディア北東部の開拓者の子孫であり，複数の農場がバホース一族によって代々引き継がれてきた。同氏の息子夫婦がいずれかの農場で宿泊業を始める予定であり，サンタクララが有力な候補地となっている。ここはタクアリ川に近く，大きな湖と森が残されていることから，野鳥の数と種類が多いことが特徴である。また，肉牛の繁殖農場としても優れた経営をしており，牛追いなどの伝統的な農場の仕事を体験することも可能である（図8）。（調査年月：2004年8月）

カンポネータの北東部に隣接するクアトロカントスは，2002年から農家民宿の経営を始めた。この農場は，大農場であったアリアンサが遺産相続により分割されたものである。農家民宿の経営は，農場主の婦人が担当している。この農場は遠隔地にあるため，観光業の経営は不安定であったが，個人の外国人バックパッカーを対象としたことにより，近年では宿泊客数が安定するようになった。宿泊業の開業に際して増築はせず，母屋の4部屋だけを客室とした。年間の宿泊客数は，数十から百人程度である。（調査年月：2004年8月）



図8　乗馬による牛追いツアー（サンタクララ）
（2004年8月　仁平撮影）

乗馬によるエコツアーはパンタナールらしい観光として人気がある．事故がないように，初心者にはおとなしい牝馬などがあてがわれる．サンタクララなどの伝統的な農場では，乗馬による牛追いツアーなどの農場体験も提供している．

3）小規模農場

バイアボニータが観光業を始めたのは1990年であり，ニェコランディアにおける最初の農家民宿である。バイアボニータが提供するエコツアーは，農場内の散策，乗馬，ナイトツアー，写真ツアーなどである。宿泊料金（一人一泊あたり）は2001年には110だったが，2005年には250レアルに値上がりした。宿泊料金以外に，コルンバから農場までの移動に農場のトラックを使用した場合，500レアルの料金がかかる。観光の最盛期は，乾季の7・8月である。宿泊客の約60％がドイツ，イタリア，アメリカ合衆国をはじめとする外国人である。2002年以降，海外からの宿泊客が減少しており，2004年の宿泊客数は述べ230人ほどであった。（調査年月：2005年3月他）

ベレニーセは，2002年からカンポグランデの私立大学によって借り上げられている。主に生物学や生態学の研究や授業に使用される大学の付属農場であり，2003年時点で放牧されている牛はいなかった。地主はバイアボニータ農場の親類であり，コルンバに住んでいる。ベレニーセとバイアボ

ニータの農場主の祖父は，33,000ha を所有する大農場主であったが，2度の遺産相続を経て1,000～3,000ha 規模の小規模な農場に分割された。(調査年月：2003年8月)

4）農家民宿の経営の特色

ニェコランディアにおける農家民宿は，小規模な農場から観光業が始まったこと，経営を始めたのは農場外部の出身者が多いこと，観光ガイドは農場関係者が担当する場合が多いことに特色がある。小規模農場は，遺産相続によって分割された大農場の一部であり，牧場経営だけでは収入が少ないこともあり，農家民宿の経営を導入するようになった。先のバイアボニータ農場の例では，観光，牧畜の他に養蜂業も行っている。農場外部の出身者について，2002年以前に宿泊業をはじめた農家民宿では，実験農場となったベレニーセを除いて，土地相続者の配偶者が観光業を始めている。彼らは都市の出身であり，観光業という新しい経営の導入に大きな興味を持っていた。例えば，カンポネータの農場主は，自分の農場ばかりでなく，観光ガイド兼運転手として，パンタナールを中心とする様々な場所を観光客に紹介している。観光ガイドについて，ニェコランディアの農家民宿では，年間を通して宿泊客がさほど多くなく，季節性があるがあるため，農場主やその親族，あるいは牧夫などがエコツアーのガイドを担当している。バイアボニータ農場では，2001 年までは専門の観光ガイドを雇っていたが，彼は宿泊客が少ない時期には，コルンバの自動車修理工場で働いていた。

Ⅳ　外縁地域のエコツーリズム：パイアグアスの例

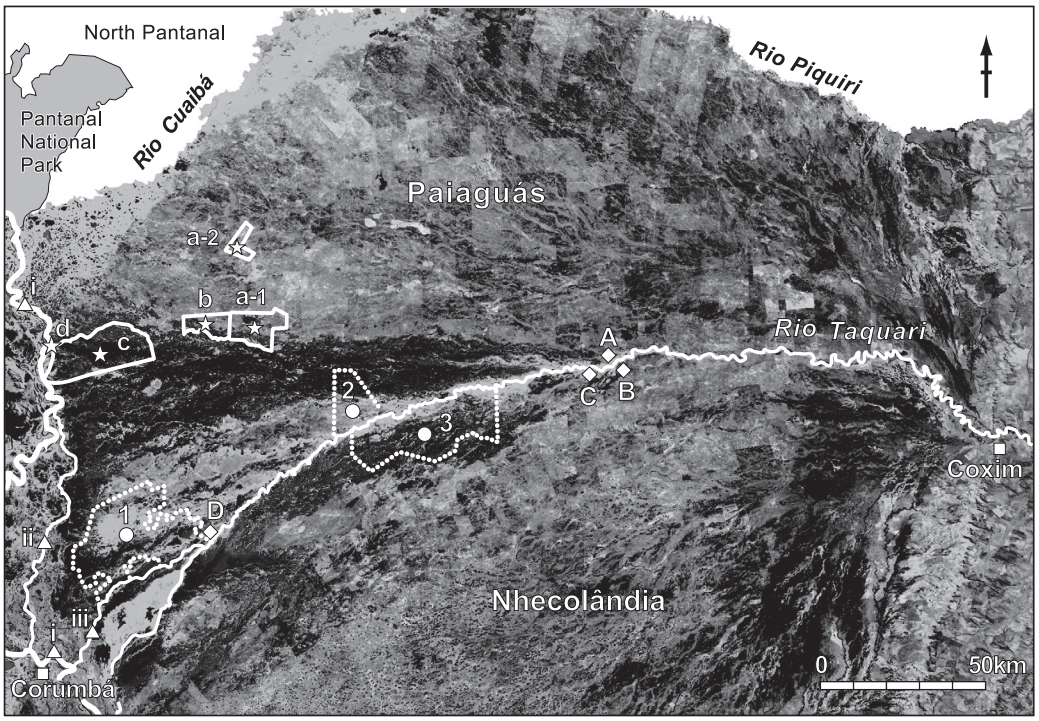
1．観光資源の概要と宿泊施設の分布

パイアグアスは，州境となっているクイアバ川とピクイリ川を北端とし，タクアリ川を南端とする（図1)。パンタナール湿原のほぼ中央に位置し，パンタナールの下位地域の中でもニェコランディアと並んで広い面積を有する。その面積は2.71km^2であり，日本の近畿地方とほぼ同じ面積である。パイアグアスという地名は，先住民のパイアグア族に由来する。

図9のａ～ｃは，パイアグアスにおいて調査した農場の分布を示したものである。パイアグアスは，コルンバやクイアバなどの湿原の縁辺に位置する大都市から遠方にあり，州道などの幹線道路も整備されていない。そのためパイアグアスでは，動植物相の豊かさは他の地域を上回ると言われるものの，観光業はふるわなかった。パイアグアスの農場は，伝統的に牧畜によって生計を立ててきたが，近年の社会・経済的および自然環境の変化に伴って，いくつかの農場の経営が変化しつつある。

最も大きな環境の変化は，法律によりタクアリ川のアロンバード（自然堤防の破堤部で河川水の流出口）の閉鎖が禁止されたことにより，下流の広大な地域が浸水したことである。水没地域では，農場の母屋や牧場施設のわずかな高まりを除いて，広い面積が一年中水没するようになった。そこでは森林の樹木が枯れてしまい，上空から見ると，無数の爪楊枝が地面に突き刺さったように見える。浸水地に位置する農場や集団入植地（図9の1～3）では肉牛の生産が不可能になり，土地の放棄が相次いだ。浸水域縁辺部の農場では，新たな放牧地を購入したり（図9のa-1がa-2を購入），観光業を始める農場が出現した（第9図ｂとｃ)。

本研究で事例とするのは，パイアグアスにおいて観光業を始めたサンルイズとサクラメントである。これらは同じ農場主によって経営されている農場であり，内陸部のサンルイズ農場が2000年に，パラグアイ川沿いのサクラメント農場が2004



☆ Farm and Port [a-1: Fazenda Bela Vista　a-2: Retiro de Fazenda Bela Vista　b: Fazenda São Luiz　c: Fazenda Sacramento　d: Porto São Pedro]
○ Colony [1: Colonia São Domingos and others　2: Baguari and others　3: Bon Jesus do Taquari and others]
△ River [i: Rio Paraguai　ii: Rio Paraguai-Milim　iii: Rio Taquari Velha]　◇ Arrombamento [A: Caronal　B: Ferro　C: Santa Anataria　D: Zé da Costa]

図9　パイアグアスにおける調査農場の分布（2007年）
（現地調査と衛星写真により作成）

年に観光業を導入した。前者は7,400haの中規模農場であり，後者は24,000haの大規模農場である。

パイアグアスはパラグアイ川の上流部に相当し，人口希薄地帯であるため，漁業資源が豊富である。10隻程度のモーターボートを積みこんだホテル船（バルコホテル）が回遊するのもこの地域である。また，内陸部では，道路が整備されておらず，遠隔地であることから，伝統的な牧畜経営や農場景観が維持されている。パイアグアスの北西部に隣接するパンタナール国立公園と，その周囲にあるパンタナール自然保護地域群もまた，パイアグアスの農家民宿にとって重要な観光資源となっている（図10）[2)]。

2．農家民宿の経営事例

1）サンルイズ農場

サンルイズは，コルンバから直線距離で約110km北西に位置する。小型飛行機ならば，約1時間の距離であるが，水路と陸路を使用すると移動に2日かかる。図11は，サンルイズの敷地と浸水域を示したものである。この農場は，ヴェルメーリョ川とマタカショーロ川の間に位置し，東西約14km，南北約6kmの範囲に広がる。その敷地には4つの牧区があるが，タクアリ川のアロンバードの開放によって，敷地の60％が浸水地となった。特に，母屋の南部のインベルナディーニャ牧区はすべて水没し，放牧は不可能になった。

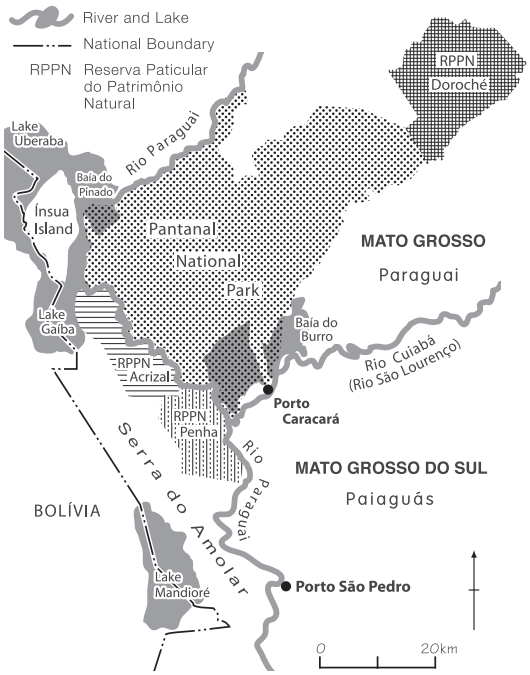


図10　パンタナール国立公園と周囲の保護地区（2007年）

（現地調査により作成）

サンルイズでは，1997年に洪水の被害により牛が500頭減少した。農場経営を維持するために，農場主は銀行から借金をすることもあった。この損失を埋め合わせようとして導入したのが観光業である。当初は，親戚や友人を対象として，日帰りで乗馬やボートツアーを提供した。当時は日帰りツアーだけの提供であり，観光客は，コルンバや北パンタナールのカセレスより，飛行機でこの農場を訪れた。その後，パンタナール国立公園と周囲のRPPN（Reserva Paticular do Patrimônio Natural，自然遺産の個人保留地）がユネスコの世界遺産に登録されて，この地域の知名度が高まると，主に外国人観光客が宿泊するようになった。

宿泊料金は，1人1泊200レアルである。この料金には，農場内の観察や乗馬などのエコツアー，および1日3回の食事などが含まれる。モーターボートで長距離を移動する場合には，運転手とガソリン代で100レアルなどが加算される。宿泊施設は，農場主夫婦が使用している伝統的な母屋である。観光客が宿泊できる部屋は3つであり，宿

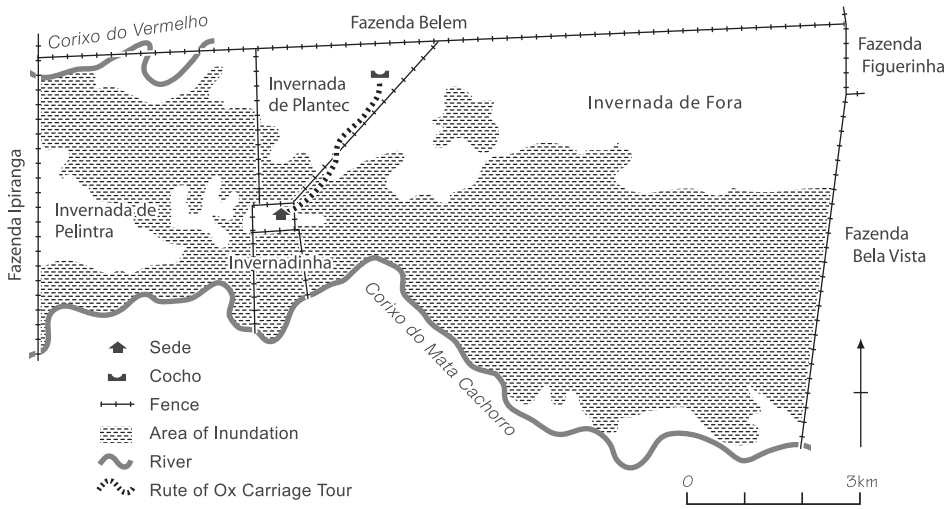


図11　パイアグアスにおける農家民宿の敷地（2007年）

（現地調査と衛星写真により作成）

泊客数は最大で6人程度である。したがって，この農家民宿では，一度に1グループの観光客しか受け入れない。グループの平均的な滞在日数は4泊である。観光ガイドは，農場主の夫が担当している。彼は先代の農場主の息子であり，当地の自然環境や歴史を最も熟知する一人である。

この農場の宿泊業の経営では，年間6グループを受け入れることが目標にされる。この数は少ないように思われるが，例えば，6人のグループが4泊して，そのうちモーターボートを2日使用した場合，その滞在費は6,000レアルとなる。これは，農場の仔牛を20頭ほど販売した価格に匹敵する。したがって，6グループの観光収入があれば，牛のワクチンとミネラル代，および牧夫の賃金など，農場の基本的な運営資金が十分にまかなえる。

2006年にサンルイズに滞在したのは3グループであった。すべてイギリス人であり，そのうち2つは野鳥観察家のグループであった。この野鳥観察グループは，パンタナール以前に，カナダとアメリカでも観察旅行をしてきた。もう1つは，ジャガーを見ることを目的とした動物観察のグループであった。これら3グループは，後述するサクラメント農場のサンペドロ港（ポルトサンペドロ）にも滞在した。

この農場の観光業の売りは，野生動物が豊富なことに加えて，伝統的なパンタナールの生活を体験できることにある。その代表的なものが，カーホデボイ（牛車）によるトレッキングである[3)]。カーホデボイのトレッキングは，母屋からプランテック牧区にある塩置場（コッショ）まで，塩を運ぶ作業を体験するものであり，片道3kmの距離を50分かけて移動する。そのうち1kmは完全に水没した道であるが，4頭の牛に引かれたカーホデボイは，ミネラル抜きの25kg入りの塩袋3つと観光客5人を載せても問題なく移動できた。（調査年月：2007年8月）

2）サクラメント農場

パラグアイ川に面するサクラメントは，24,000haの面積があり，パイアグアスでも大規模な農場である。しかし総面積の約7割が水没しているため，畜産業はふるわない。サクラメントは，かつては33,000haの大農場であり，現在の農場主夫婦の妻方の父が所有者であった。彼の死後，妻と子供たちに土地が相続され，農場は3つに分割された。最も広い面積を相続したのが，末子である現在の地主夫婦の妻であった。現在の農場主が畜産経営を開始した1970年代中頃には，サクラメントとサンルイズで合計16,000頭の牛を飼育していた。現在では，インベルナディーニャデサクラメント牧区で数十頭の乳牛を飼育している。水没していない約5,000haの牧草地は，近隣の農場に貸している。その賃料は牛1頭あたり3レアル／月であり，放牧頭数は1,000頭である。

この農場の宿泊施設は，繁殖牛の出荷港であるサンペドロ港にある。サンペドロの宿泊施設は，大型のハンモック小屋（レダリオ）だけである。ハンモック小屋には，6つのハンモックと4つのソファーベッドがあり，洗面所の横には2つのベッドが備え付けられた小部屋もある。虫の進入を防ぐために，入り口は二重網戸になっている。ハンモック小屋に隣接して，母屋，バーベキュー用の施設，発電機と資材置き場，船着場などの施設がある。

2006年にサンペドロ港に宿泊した観光客は約200人であった。その国籍は，ブラジル人が7割で，外国人が3割であった。ブラジル人は，パラナ州，サンパウロ州，および，マトグロッソドスル州のカンポグランデとコルンバからの客がほとんどであった。外国人は，イギリス人が最も多く，次いで，フランス人，スイス人，イタリア人，スペイン人などが滞在した。サンペドロ港に滞在する観光客は，ほとんどがスポーツフィッシングを行

う。敷地に隣接するサンペドロ湖は釣りの名所として知られており，ルアーで釣るツクナレが豊富に生息している。宿泊客でなくても，ホテル船から出発したモーターボートなど，1艘あたり50レアルの料金でサンペドロ湖での釣りを許可している。サンペドロ港の管理人として母屋に住んでいる老夫婦は，サンペドロ湖に入ってくる釣り客から入場料を徴収したり，20レアルで釣り道具を貸し出したりする。農場主は，サンペドロ湖に毎日のようにモーターボートが入り込んでいたのを見て，その漁業資源を活かした観光業を始めようと考えた。彼らは，2001年に観光客の受け入れを検討し，2003年までに宿泊施設を整備し，2004年から宿泊客を受け入れるようになった。観光客の誘致は，コルンバにある旅行代理店に依頼している。（調査年月：2007年9月）

V　南パンタナールにおけるエコツーリズム発展の課題

1．局地的な観光発展

2000年に世界遺産にも登録されたパンタナールは，ブラジルを代表するエコツーリズムの観光地として有名になった。観光の核心地であるエストラーダパルケ沿線においては，農場の売買が頻繁になり，土地価格の急上昇を招いている。例えば，1990年代後半に農家民宿を開業した経営者は，1haあたり230～300レアルの価格で購入していた。一方，2001年に開業した宿泊施設の土地価格は，350～400レアル/haとなり，2003年になると730レアル/haまで上昇した。土地を購入し，宿泊施設を建設する地主の中には，東部海岸の大都市や外国など，遠方出身の地主が増加している。また，さらに地価が上昇したら農場を手放したいという意見も聞かれるなど，エストラーダパルケ沿線における観光業は投機的な事業になった。

核心地域ではエコツーリズムがマスツーリズム化する一方で，観光ブームの影響は核心周辺地域のニェコランディアや外縁地域のパイアグアスには及んでいない。それどころか，エストラーダパルケ沿線における観光客数の増加とは対照的に，ニェコランディアにおいては観光客数が減少している。例えば，ニェコランディアで農家民宿を経営するある農場主は，観光客数が減少したことにより，2004年に農家民宿の経営を止め，母屋を含む農場の一部を売却してしまった。その農場主は都市で賃貸住宅の経営を初め，新しい農場主は牛の放牧経営だけを続けている。また，ある農家民宿では，観光客の減少を補うために，毎年のように宿泊費を値上げしている。このように，観光発展は交通の便がよい核心地域に限定され，他の地域はすでに衰退傾向にあることが課題となっている。

2．環境保護と観光業のアンバランス

パンタナールのエコツーリズムは，地域の自然環境に大きく依存しながら，観光経営面でも収益を上げなければならない。しかし，大勢の観光客を受け入れると自然環境への負荷が大きくなり，逆に受け入れ数が少なければ収入が減ってしまう。このような環境保護と経営維持のジレンマは，多くの観光客を受け容れている核心地域において大きな問題となっている。例えば，エストラーダパルケは，ポルトダマンガ付近で野生のカピバラの生息地を通過するが，2002年の調査時においては，約1kmの範囲で18匹のカピバラの轢死体が確認された。高速で昼夜を問わず走行する自動車による野生動物の事故死は深刻な問題となっている（Wagner, 1997）。

一方，外縁部においては，タクアリ川のアロンバードの周年解放が，下流域の水没を通して住民の生活ばかりでなく，野生動植物の生息域にも大きな被害をもたらしている。アロンバードを解放

するようになった理由の一つは理念的なもので，河川の流路を自然のなすままに放置して，パンタナールの原初的な自然環境を復活させることにある。しかし，現実には漁業資源などを巡る漁師と牧畜家，あるいは上流部の農場との間の政治的な問題が複雑に絡み合っている。法律による規制とNGOなどの環境保護団体による監視が強くなり，アロンバードが人為的に塞がれることが無くなると，下流部の景観は人間が生活を始める前の景観に戻ってきた。しかし，恒常的な浸水地の拡大と共に，人々の生活空間や，彼らが育んできた牧畜・河川文化も消失の危機にある。自然環境ばかりでなく，住民の生活や文化を今よりも重要視する姿勢がなければ，エコツーリズムの内発的な発展は望めない。

3．多様な観光客に対する対応力の低さ

パンタナールにおいてエコツーリズムが導入された当初は，海外からのバードウオッチャーが主な観光客だった。彼らは多くの金を地元に落とすばかりでなく，野鳥や地域の自然環境についても意欲的に学習する質の高い観光客だった。しかし，パンタナールの観光がブームになると，昼はエコツアーに能動的に参加するだけで，夜は大騒ぎして過ごすなどの物見遊山的な観光客も増えてきた。これらの観光客は，いずれも家族や友人のグループで宿泊施設に滞在していたが，近年では個人旅行の宿泊客も増加している。彼らは，ボリビア，ブラジル，パラグアイ，アルゼンチンなどの南米諸国を旅している若いバックパッカーである。エストラーダパルケ沿線には，バックパッカーを相手にするキャンプ場や簡易宿泊施設が開設されたが，バックパッカーの宿泊客数や滞在日数をあらかじめ確定することは困難であり，加えて彼らが地元に落とす金は少ないため，その経営は不安定であると言われる（図12）。



図12　観光用トラックの荷台に乗り込むバックパッカー

（2005年8月　仁平撮影）

パンタナールの観光核心地域では，外国人の若いバックパッカーが増加しており，彼らを対象としたキャンプ場や簡易宿泊施設も増えてきた．

また，従来型の宿泊客でも，農場の散策を目的とする客とスポーツフィッシングを目的とする客とでは，観光の志向が大きく異なる。エストラーダパルケ沿線の核心地域では，釣り宿と農家民宿とが分かれており，滞在客の容貌に合わせたエコツアーが提供されている。一方，農場散策やスポーツフィッシングなどの複数のエコツアーを同じ経営者が提供しなければならない外縁部の農家民宿では，多様な観光客の要望に応えるのは難しい。一般に，農場に滞在して散策などする宿泊客は，河川や湖でのスポーツフィッシングやボートツアーなどにも参加するが，スポーツフィッシングを主目的とする客は，わざわざ農場を訪れて野生動物や牛を見ることは少ないという。

4．人の激しい流動性

人の流動には，エコツーリズム専門家の流入などのプラスの面もあるが，エコツーリズムに関わる観光ガイドや牧夫など，地域の自然環境を熟知する人材の流出など，マイナスの面が目立つ。エストラーダパルケ沿線では，エコツーリズムブー

ムによる土地の売却・購入を通して，農場主，釣り宿の経営者，および牧夫や観光ガイドなどの従業員が頻繁に入れ替わっている。このような人材の流動性は，核心周辺地域や外縁地域でもみられる。パンタナールで働く牧夫や料理人は，農場や他の職業を転々とするが，その理由の一つは，彼らの給料が最低賃金程度と非常に安いことにある。パンタナールにおける牧畜は，天然の牧草地に依存した粗放的な放牧であり，加えて牛の価格が低迷していることもあって農場経営は厳しく，状況に応じた従業員の調整は日常的に繰り返されている。その結果，その地域の自然環境や歴史，伝統的な牧畜文化を熟知する人は少なくなり，エコツアーの質を維持することが難しくなる。今後，同じ農場で長年働いてきた牧夫などの地元住民を，積極的に観光業に取り込むことが必要である。

５．周辺地域との連携

パンタナールのエコツーリズムが持続的に発展していくためには，周辺地域との連携が欠かせないが，現在のパンタナールのエコツーリズムのほとんどが，地域内で完結する。パンタナールの周辺には，ボニートやシャパーダドスギマランエスなどの景勝地，州境付近に集中する国立公園と自然保護区，点在する先住民の保護区など，エコツーリズムに関連する自然的・文化的な要素が数多く分布する。パンタナールのエコツーリズムとそれらをいかに連携させるのかも，今後の観光発展のための重要な課題である。

また，パンタナールの東に広がるブラジル高原では，かつて牧畜が盛んであったが，近年では大豆やとうもろこしなどの穀作農業や綿花栽培が拡大している。これらの耕地から流出する土壌，農薬，化学肥料などがパンタナールの水環境に与える影響を絶えず監視する必要がある。同様に，北パンタナールのポコネ周辺の金山や，南パンタナールのコルンバ南部の鉄山など，大規模な露天掘りの鉱山の活動が環境に与える影響にも注意する必要がある。

Ⅵ　おわりに

ブラジル・パンタナールでは，季節によって浸水地の面積が大きく変化することや，都市から遠隔地に位置するなどの条件から，伝統的に粗放的な放牧業が営まれてきた。しかし近年では，熱帯湿原の豊かな動植物相を生かして，エコツアーを中心とした観光業がブラジル・パンタナールにおいて発展してきた。2000年には湿原の一部が世界自然遺産に登録され，エストラーダパルケやトランスパンタネイラなどの幹線道路を基軸とした観光地化が周辺地域に波及している。

本研究では，南パンタナールを対象として，観光地化の程度から核心地域（エストラーダパルケ），周辺地域（ニェコランディア），外縁地域（パイアグアス）の3地域に区分して，宿泊施設の事例を分析することから，観光地化の特徴とその課題を明らかにした。宿泊施設の分析に際しては，観光業の開業までの経緯，湿原の利用と水位変化の対応，施設の構成，エコツーリズムの種類と料金体系，観光客の属性と集客圏という5つの段階に注目した。

事例の分析から見いだされた課題として，核心地域における外部出身者による投機的な経営やエコツアーガイドの質の劣化，大衆化に伴う客層の変化など，世界遺産を擁する観光地に共通の問題点を指摘することができた。また，水位上昇と湿原化に伴う畜産業から観光業への転業，牧夫による観光ガイドの副業，核心・外縁地域間の地域格差の拡大といったパンタナール特有の特徴と問題点も抽出された。

今後，内発的で持続的な観光業の発展を提案していくためには，湿原内外の資源を有効に活用し

ながら，それぞれの地域性を十分に考慮した計画が必要である。その際，政治的・経済的な利害関係にとらわれすぎないこと，湿原独自の文化を大切にすること，地域住民の知識を取り入れることなどが必要である。また，海外から大勢の観光客を集めるために，観光施設のサービスはグローバルスタンダードで考える必要がある。

現地調査に際しては，ニェコランディアとパイアグアスの農場主，宿泊施設の経営者，従業員，牧夫，観光ガイドの皆様のお世話になりました。現地調査と論文執筆に際しては，立教大学文学部の丸山宏明氏，横浜国立大学教育人間科学部の吉田圭一郎氏，マトグロッソドスル連邦大学獣医学部のアナ・コジマ氏のアドバイスを賜りました。以上，記して感謝を申し上げます。本項の内容の一部は，日本地理学会2005年度春季学術大会（青山学院大学），日本地理学会2007年度春季学術大会（東京大学）にて発表した。また，本項を作成するにあたり，平成19～22年度科学研究費補助金・基盤研究（B）「ブラジル・パンタナールの伝統的な湿地管理システムを活かした環境保全と内発的発展」（課題番号：19401035．代表：丸山宏明），平成19～22年度科学研究費補助金・基盤研究（A）「商品化する日本の農村空間に関する人文地理学的研究」（課題番号：19202027．代表：田林　明），平成22～25年度科学研究費補助金・基盤研究（A）「フィールドワーク方法論の体系化」（課題番号：22242027．代表：村山祐司）を使用した。

注

1）パンタナールはサバナ気候に属し，年平均気温は24度，年降水量は1,100～1,500mmである。11～5月が雨季に相当するが，その中でも12～2月にかけて年降水量の45％が集中する（Rodela and Neto, 2006; Swarts, 2000）。マラカジュー山脈やサンジェロニモ山脈などのパンタナール周囲の山脈は，ブラジル高原と湿原を隔てる崖のような山脈である（Galvão, 1960）。パンタナール周辺のブラジル高原と山脈の海抜は500～1,000m程度，パンタナールの海抜は100m前後である。

2）マトグロッソとマトグロッソドスルの州境，およびボリビアとの国境付近には，パンタナール国立公園と3つのRPPNがある。これらの保護地域のなかで最も広いのがパンタナール国立公園であり，その面積は13.6万haに上る。さらに，北西部に隣接するドロシェ（2.7万ha）や，パラグアイ川を挟んでアモラール山脈の東麓にあるアクリザル（1.4万ha）とペーニャ（1.3万ha）のRPPNをあわせると，大阪府ほどの面積が保護地域となっている。これらの国立公園とRPPNは，2001年にユネスコの世界自然遺産に登録された。これらの保護地域はイバーマ（ブラジル資源・環境庁）によって管理されている。イバーマの許可なしで観光客が保護地域内に入ったり，釣りなどの収奪行為をした場合には，500～7,000レアル（約2万5千円～35万円）の罰金が科せられる。この地域は，パラグアイ川とクイアバ川の合流地点であり，洪水の常襲地帯である。ラプラタ川の河口から2,300～2,400kmも上流部にあるにもかかわらず，標高はわずかに90～110mである。この地域には，5,000haを超える規模の農場が複数存在したが，1974年の大洪水など，相次ぐ水害のため放牧地は放棄されていた。その土地を政府が借り上げて，1981年に国立公園に指定した。

3）カーホデボイは，大きな2つの車輪と荷台，および牛の牽引部分からなる素朴な荷物運搬車である。カーホデボイは，ファゼンダで使用する薪や，牛のミネラルなどの農業資材の運搬として伝統的に使用されてきた。しかし，トラクターやトラックが普及したため，カーホデボイを所有し，運用できるファゼンダの数は激減している。筆者が現地調査を実施したり，資料を集めたりした40以上の宿泊施設の中で，カーホデボイによるトレッキングを提供しているのは，サンルイズだけであった。カーホデボイの外観で目立つのは，ジャンタと呼ばれる大きな2つの車輪（直径1.8m）である。荷台には荷物を固定するために，フエロと呼ばれる側板が付いている。車輪は，ピウバ（またはイペーアマレロ）の木と鉄で作られており，1つの車輪で約100kgの重量がある。ピウバの材木は，固く水に強いため，車軸（マッセーロ）とスポーク（カンボータ）にも使用される。ピウバと似た木（同色の黄色い花を咲かせる）でパラトゥードがあるが，こちらは柔らかく加工しやすいため，屋根などの建材に使用される。カーホデボイを引っ張るのは，ポンテイロと呼ばれる4～6頭のウシである。ポンテイロは，熟練のペオン（牧夫）が長年の訓練をしてつくられた特別のウシである。ポンテイロには，ウシの群れを先導するシヌエイロとよばれるウシの中でも，特に穏やかで，力の強い個体が選別される。また，乳牛から生まれた雄牛であり，その品種は，トゥクーラの系列が入った混血がよいと言われる。トゥクーラは，ポルトガル人が金を採掘する際にパンタナールに持ち込んだ食料用の牛が野生化したものであり，熱帯湿原の環境に適応した種である。ポンテイロは，他の放牧牛と異なって，

廃牛にされることはなく，固有の名前を与えられて，死ぬまで農場の家族のように大切にされる。ポンテイロは，それを訓練したペオン以外の人間が牽引器具を取り付けることを嫌うため，カーホデボイを動かすためには，同じ農場で長年働いているペオンの存在が不可欠である。

文　献

仁平尊明（2003）：エコツーリズム－観光業の発展と場所特性の変化．地理，**48**(12)，30-37.

仁平尊明・コジマ，A. Y.（2007）：ブラジル・南パンタナールにおけるエコツーリズムの発展．丸山浩明編『ブラジル・パンタナールにおける熱帯性湿原の包括的環境保全戦略』（平成16年度～平成18年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書）139-157，立教大学文学部.

丸山浩明・仁平尊明（2005）：ブラジル・南パンタナールのビオトープマップ－ファゼンダ・バイア・ボニータの事例－．地学雑誌，**114**，68-77.

丸山浩明・仁平尊明・コジマ，A. Y.（2009）：ブラジル・南パンタナールの伝統的な農場経営とその課題－バイアボニータ農場の事例－．地理空間，**2**，99-132.

Banducci, A., Jr. and Moretti, E. C.（2001）：*Qual paraíso?: Turisomo e ambiente em Bonito e no Pantanal*. Edições Chronos and Editoria UFMS.（P）

Barros, A. L.（1998）: *Gente Pantaneira: Crônicas da sua história*. Lacerda Editores.（P）

Bertelli, A. P.（1984）: *O paraíso das espécies vivas: Pantanal de Mato Grosso*. Cerifa Editoria.（P）

Bordest, S. M. L., Macedo, M. and Priante, J. C. R.（1996）: Potencialidades e limitaçoes do turismo na Bacia do Alto Paraguai em Mato Grosso. In Resende, E. K., Moretti, E. C., Bortolotto, I. M., Mourao, G. M., Loureiro, J. M. F., Oliveira, M. E. B., Dantas, M., Santomo, M. and Santos, S. A. eds. *Resumos: II simposio sobre recursos naturais e socioeconomicos do Pantanal*. EMBRAPASPI, 503-506.（P）

Fabichak, I.（1978）: *A pesca no Pantanal de Mato Grosso*. Livaria Nobel.（P）

Galvão, M. V. ed.（1960）: *Geografia do Brasil: Grande região Centro-Oeste*. IBGE.（P）

Honey, M.（2008）: *Ecotourism and sustainable development, second edition: Who owns paradise?* Island Press.

Maruyama, H., Nihei, T. and Nishiwaki, Y.（2005）：Ecotourism in the north Pantanal, Brazil: Regional bases and subjects for sustainable development. *Geographical Review of Japan*, **78**, 289-310.

Paixão, R. O.（2004）: Turismo regional: Problemas e perspectivas. In SIMPAN 2004 ed. *Simpósio sobre recursos naturais e sócio-econômicos do Pantanal*. Embrapa Pantanal, 76-80.（P）

Proença, A. C.（1992）: *Pantanal: Gente, tradição e historia*. Editora da Universidade de Federal de Mato Grosso do Sul.（P）

Rodela, L. G. and Neto, J. P. Q.（2006）: Estacionalidade do clima no Pantanal da Nhecolândia, Mato Grosso do Sul, Brazil. *Revista Brasileira de Cartografia*, **59**, 101-113.（P）

Silva, J. S. V. da and Abdon, M. M.（1998）: Delimitação do Pantanal Brasileiro e suas sub-regiões. *Pesquisa Agropecuária Brasileira*, **33**, 1703-1713.（P）

Souza, L. G.（1973）: *História de uma região: Pantanal e Corumbá*. Editoria Resenha Tributárai.（P）

Swarts, F. A.（2000）: The Pantanal in the 21st century: For the planet's largest wetland, an uncertain future. In Swarts, F. A. ed. *The Pantanal: Understanding and preserving the world's largest wetland*. Paragon House, 1-22.

Trent, D.（2000）: Ecotourism in the Pantanal and its role as a viable economic incentive for conservation. In Swarts, F. A. ed. *The Pantanal: Understanding and preserving the world's largest wetland*. Paragon House, 107-115.

Wagner, A. F.（1997）: *Efeitos da BR-262 na mortalidade de vertebrados silvestres: Síntese naturalistic para a conservação da região do Pantanal, MS*. UFMS（Mestre em Ciéncias Biológicas）.（P）

（P）：written in Portuguese.

Geographical Space 4-1 18-42 2011

Introduction and Growth of Tourism in South Pantanal, Brazil

NIHEI Takaaki
Graduate School of Letters, Hokkaido University

In the Brazilian Pantanal, traditionally, extensive cattle grazing has continued because ot the area of inundated land changes significantly by seasons, and of its location is remote from large cities. Meanwhile, tourism based on the eco-tours that utilize the wetland's unique fauna and flora was developed recently. Part of the wetland was listed as World Heritage in 2000, and the development of tourism was accelerated along the axes of main roads in the wetland. Estrada Parque in the south Pantanal and Transpantaneira in the north Pantanal are the main axes of development.

This study examines the development of tourism in the Brazilian Pantanal by focusing on the management of accommodations such as Fazenda Pousadas (farm inns), hotels and anglers' inns that are located in the south Pantanal. To examine the accommodations, the author pays attention to five stages, i.e., circumstances of farms before the introduction of tourism, seasonal management of land and water, structure of farm facilities, types of ecotourism and their charges, and tourists and their home countries. Considering the regional differences of tourism in the south Pantanal, three types of regions are obtained as follows. (1) "Core region" is Estrada Parque in which various types of accommodations are accumulated. (2) "Peripheral region" is Nhecolândia where several farms introduced tourism after the 1990s. (3) "Outside peripheral region" is Paiaguás where ecotourism began after 2000.

As the results of the examination, some characteristics that are in common with the tourist resorts including World Heritages are extracted, i.e., (i) progress in speculative management by the managers from outside of the region, (ii) difficulty in maintaining the quality of guides, and (iii) shifting to mass-tourism and changes in types of tourists. While these characteristics are applied mainly to the core region, the others are considered especially in the peripheral and the outer peripheral regions, i.e., (iv) changes in farm management from stock raising to tourism, (v) acceptance of side-job by cowboys as tour guides, and (vi) enlargement of disparity of development between the core region and the other regions. To make profitable proposals for endogenous and sustainable development of the wetland tourism, it needs to establish well-considered plans that will make the best use of the regional resources.

Key words: ecotourism, core region, peripheral region, outside peripheral region, Pantanal